

中斎塾 東京フォーラム
平成 29 年度 第 9 回講話

平成 29 年 11 月 11 日
於 湯島聖堂

おはようございます。西谷さんの論語素読は紙芝居のような感じがします。論語の素読は映像で見るのが良いと前にも申しあげております。生き活きと登場人物が目の前に出てきて、身振り手振りを交えながら、いろいろ問答をしている。それが大型スクリーンで見えるような感じで素読をするのが良い。落語を聞いていると目の前に熊さん・八つぁんが出てくる。講談も目の前に何かわくわくするような、胸の躍るような状況を演出している。論語の素読もそうあってしかるべきだと思います。今日の西谷さんの論語素読は紙芝居仕立てで登場人物が次々と出てくる感じがします。少し論語の素読を聞いていて、古い友人の脛を叩いて「お前はなんという奴なんだ、ごく潰しじゃないか」と、小さい頃からの友達には言いたいことが言える。その光景が出てきたので良いなと思いましたので、どうぞ頑張ってください。

論語素読はいくつか効用があります。論語の素読をすることによって、知らず知らずの内に日本の文化を垣間見るように思います。特に江戸時代後半、寺子屋でみれば良いと思いますが、寺子屋の子供たちは中身なんて解らないで、ひたすら先生の言うとおりに論語素読を口まねしている。口まねをする事自体は「まねぶ」「まなぶ」となります。先生の口調をまねして論語の素読を自然と覚える。

私は「利によりて行えば怨み多し」が好きですから、すらっと出てくる。自然と明治維新時、ものの考え方、これは佐藤一斎に体现されますけれど、佐藤一斎のお弟子さん孫弟子さんが敵味方に別れて明治維新の戦いをした。論語素読をすることによってレベルアップした下級武士達が敵味方に分かれたけれども、それがうまく功を奏してというのかな、それぞれ悪人の役を甘んじて受けた人もいるし、進んで受けた人もいる。ひとつ間違えると、日本を植民地にしようとする外国の人達がいたから、そういう努力を排除しながら日本人が日本人の手で、日本人の力で明治という世を現出させていったということに論語の素読が繋がっていると思っていますので、現在も論語の素読はとても必要な物だと感じます。論語の素読をすることによって、江戸後期から明治にかけての日本人の文化レベルが少し見えてくる。現在の論語素読を全国的にみて、小学生ぐらいの子供達がまた慣れ始めている動きが増えてきました。これは良いことだと思います。ひるがえって大人は

どう見るかといえば、現代に置き換えて論語を見ましょう。

現代に置き換えて見ることによって、自分の日常生活が良いか悪いかの判断基準が見えてきます。政治のあり方、経済のあり方、教育のあり方はこれでよいのか。ということが論語素読の中から見えてまいります。論語素読の脱線はここまでにしましょう。

先ほど理事長が挨拶をしたなかで「人は晩年になればなるほど大切だ」これは澁澤栄一さんの科白にあります。それに関する掛け軸が澁澤栄一の実家にあります。深谷の実家の隣に民家があって、民家がレストランになっています。そこに理事長が言われた「晩年になればなるほど…」ということに関する考え方を澁澤栄一が漢詩にした本物が置いてあります。行った時に、ご覧になるとよいでしょう。大器晩成とは違います。晩年になって失敗すると今まで積み上げたものがガラガラと崩れてしまいます。澁澤栄一は晩年になればなるほどガラガラといきかけては、引き締めて引き締めて臍（へそ）から上は大成功した。臍から下は、綱渡りでギリギリのところなんとか引掛かった。まあ生き抜いたということですから、晩年の受け止め方は難しいですが、深谷に行かれて漢詩を見るとよいと思います。

もうひとつ「知足安分」これは中斎塾フォーラムの季刊誌に書いてありますが、石川忠久先生が知足安分について説明をしておりました。ですから知足安分は忠久先生の顔がだぶります。

最近、私が忠久先生で楽しいことは、自転車に乗っている時に詩吟を口ずさんでいますが「古希 人生七十古来稀なり」を吟じた後で、忠久先生の八十五回誕辰が浮かびます。85歳の忠久先生が軽やかにして85歳を迎えたということで、私の古希はまだまだということだと思います。

理事長の話から「知足安分」と「晩年がよい」ということをご紹介します。

中斎塾フォーラムは10年経ちましたが、10年は横の学問をしましょう。横の学問は知識を増やす。どうやったら知識が増えるかというお話をずっとしてきました。そして10年経って11年目に入りましたから、今度は縦の学問に入りましょう。縦の学問に入るために必要なものは、「横」と「縦」がどう違うかを理解することです。

今までの縦の知識は、私が知っていること、聞かれたら幾らでも教える・お話をします。ちょっと難しい字だと思ったら解説をしていましたけれども、それは簡単に聞くと覚えた気になる。わかった気になる。字も書くと、こんな字かと、その時は思えます。しかし一晩経つと忘れます。自分で辞書から調べて書くとだいたい覚える。しっかり物を覚える・自分の心の中に入れるには、自分で苦勞しなければ覚えません。

横の知識に関しては、安岡教学が良いです。安岡先生の本を読むといっぱい書いてあり

ます。凄いものばかり出てきますので知識は安岡先生の本を読めば良いと思います。

第二の縦の学問になったときは苦勞して覚えましょう。苦勞して覚えましょうというのは、中村天風先生の話を中心にと申し上げました。天風先生曰く「欲は捨てなさい」でもこの字を覚えたいと思うことは、しっかりした欲です。欲も、出来る欲と出来ない欲があります。出来ない欲は叶うわけがない。出来る欲だけ追求しなさい。例えば谷口さんが子供を産みたいと思っても男だから出産はできない。将来、可能性があるかもしれないけれど、今のところはできません。アメーバの段階でいくと、生き物はメスだそうですね。メスが自分の子孫を、遺伝子を後世に残したいということでオスを生ましめた。オスを出現せしめた。それでメスは自分の遺伝子を良いものにするためにオスを出現せしめて、そのオスと仲良くなって次の遺伝子へということが、だいたいの流れになっています。何回か言いましたけれど、生殖のためにオスを出現させたから、カマキリのメスは生殖が終われば、オスのカマキリを食べてしまう。

話が広がっていますが、前の話もしています。第二段階は天風先生の話のベースにと申し上げたので、天風先生の中身で申しあげました。

紹介書籍

『修身教授録』森信三著 致知出版社

前回、天風先生の話は宇宙真理についての本を紹介しました。心身統一法の大学院コースということで紹介をしました。

今回は、森信三先生の『修身教授録』が良いと思います。森信三先生が自分の腹を切る覚悟でこしらえた本です。

今の大阪教育大学、かつての天王寺師範学校で先生をしておられた。その当時の教科書は役に立たないから、自分で一生懸命に考えて、お上から文句をつけられたら潔く退職をしようと退職覚悟で語った講義録です。それが本になって刊行された書物です。

この中で良いなと思う部分は、教育に関するものです。教育者としての理想ですが、おもしろい科白で「良い先生にして偉い先生、偉い先生にして良い先生。これが教育者の理想です」と、学生さん達に話しています。

学生の中で字を書くのがとても遅い学生を選んで、前に座らせて、その学生が書いているものを見ながら「書いたね、書いたね」と言いながら、ゆっくり自分でも考えながら話していき出来た書物です。この「良い先生にして偉い先生、偉い先生にして良い先生」と

は、何度も申しあげている「良い学者・悪い学者」と、同じ言いかただと思います。根っこは同じです。

湯島聖堂は今年で 327 年経ちました。現在の聖堂のトップは石川忠久先生で、忠久先生は聖堂に関わり合って 50 年経ちました。その前のトップが宇野精一先生。宇野精一先生の前が加藤常賢先生です。宇野精一先生が 85~6 歳の頃だったと思いますが、猪瀬理事長が宇野先生に質問をしました。「先生の論語の講義はチンプンカンプンでなんだか分からない。もっと分かりやすく教えてくださいませんか」といったら、何度も言う科白ですけれども「君はなんと難しいことを言う。論語を分かりやすく説明するのは至難中の至難だよ。難しいことを君は注文するね」一回目はそれで終わり。二回目「先生のお話一所懸命に聞いたけど分からなかったので今日は本当に分かりやすくお願いします」と。終わった後、宇野先生が「分かりましたか」と聞いて「分かりません」と答えています。論語の講義をやさしくということとは、とても難しい。宇野精一先生は碩学といわれた先生で学者中の学者です。だからここに落とし穴があります。学者は学者としての読み方をします。現代に活かす活かし方は、ごく選ばれた人間にしか読み取れない。お弟子さんでも同じです。ご本人は学問のままの解説は縦横無尽にいたしますが、「分かりやすく言う」というのは難しいのでしよう。私が教わった石川梅次郎先生は「難しい学問をやさしく教えられる学者が本物の学者。やさしいことを難しく教える学者は似非学者」と、教えていただいています。図らずもその科白に、この『修身教授録』の中で森信三先生が言っていることと繋がりました。

「人間の知恵」自分で自分の問題、自分が抱えている問題に気づいて自分で解決するところにある。知恵には色々な知識があり、その知識がある日突然、融合して集大成されて溶け合うと一つレベルが上がります。レベルが上にあがったときに知恵になります。その知恵は「中」と書きます。中という字は色々な知識が段々集まり合って、何かのきっかけがあってポーンと一つレベルが上がっていく。これを「中」という文字で表す。一書いて上にあがると言います。これは「中」という文字を辞書で調べた時には、こういう解説はありませんが、安岡教学で調べていくとそういう解説にぶつかります。辞書で調べても出てこない解説が幾つもありますので、辞書で調べて「この解説は出ていません」と、この間も北関東フォーラムでありました。それで「あなたの辞書は何ですか」と聞いたら、このぐらいの大きさの辞書でした。それで「その辞書が悪い」と言いましたら「この辞書しか持っていません」と言いますので、私の部屋に来てもらって、本棚にある辞書の説明をしました。私が辞書を見る時は、最初はここら辺の棚、ちょっと難しくなってきたらここら辺の棚、それでもどうしようもないなと思ったら日本で一番の最高レベルの棚を紹介して「ここにある辞書を全部調べれば、分かりますから」と言いまして、それで分からなかったら「聞いてください」という言い方をしました。解説している中でピンとこない、辞書で調べても出ていないと思いましたが、どうぞお聞きください。解説申しあげます。

ということで「人間の知恵」は、自分で自分の問題に気づいて自分で解決する。そういう

う知恵をつくる。そういう判断、基準をつくっていく。そういう人間をつくるのが教育だということです。

教育とは、自分で自分を向上させていく知恵を自ら生み出す人間。そういう人をつくるのが教育だといいます。そう森信三先生は考えているから、その当時の教科書は使わなかったんでしょう。

もうひとつ楽しいことが、天風先生の科白で「同じ知識でも同一のままでも自分が苦勞して得たものでないと、そのものの真の値打ちは分からない」とあります。で、お聞きしますが比田井さんは呼吸、息をしていますよね。では空気がない所に行ったらどうでしょうか。

比田井副理事長一だいたい死ぬと思いますが、考えたことがないです。

六中観に「死中活あり」という科白があります。死ぬ氣でおやんなさいとあります。私の家内は海で死にかけたことがあるから分かると言います。子供の頃、足が攣ってハッと氣がついたら海底に沈んでいる。上を見ると海面が見えて大人が慌てている。自分は海底で息が出来ずもがいている。息が出来ない、苦しい、死にたくない死にたくない、もがいていたら上で見ていた大人が助けてくれた。なんとか引き上げられて、もう無我夢中で息をした、空気を吸い込んだ。空気が吸えなくなってしまった時は、空気の有難さが分かったということです。でも自分でわざわざ死にかけることはないですが、何かの加減で死にかけたという体験は、より深く、なぜ私がそういう経験をしたのかと考えることには良いと思います。

だから死にかけたことはありませんかという話です。

比田井副理事長一そういう無理な人生を歩まないようにしています。

これ不可抗力ですよ。不可抗力で、こういうことになった訳ですから、でもそういう不可抗力が無い人生も、やっぱり良い人生です。

後半を始めます。先ほど『修身教授録』が途中でしたので、申し上げます。同じ知識、同一の物でも苦勞に苦勞を重ねてハッと氣づく・悟る。そういう具合で得たものでなければ、真の値打ちは分かりませんと書いてあります。それから人間が本当の意味で悟・自覚をすることは…これは学生向けに言っていますから、森信三先生は「三分の一どころか二分の一ぐらい生きないと出来ない」と。人間について根本的な有限性があると書いてあり

ます。

『修身教授録』は、どのページを開けてみても、おやっと思うことがたくさん入っています。どうぞお回してください。

基本哲学<知足>

人生を生きていく上で、頭の中が真っ白になることがたまにあります。最近、真っ白になったという人の話をしましょうか。こうやってすぐ脱線をしてしまいますが、でもちょっと脱線させてもらおうと、中斎塾の会員さんで堅いイメージがあり冗談も言わないような人が、ウクレレをしている。この間、100人ぐらいがいる人前に出てウクレレをしたそうです。やりだした途端、頭が真っ白になった。…よくある話です。

どのような場面でも、頭の中が真っ白になった時は「知足」を思い出してください。知足でピンとこない人は「ほどほど」または「適当なところで良い。ほどよいところで良い。そんなに完璧を求めちゃいけないね」と。ほどほどのところでいいと、それが人生の中で色々なポイントに出てきます。「知足」については、「ほどほど」で、お考えいただければ良いでしょう。

論語の視点

【四六】原壤 夷して俟つ。子曰く、幼にして孫弟ならず、長じて述ぶること無く、老いて死せず。是を賊と為すと。杖を以て其の脛を叩く。

「原壤 夷して俟つ」学生が何座りというのかな、体育座りというのかな。この間、電車に乗っていたら、そういう子がたくさんいました。電車の中でもしゃがみこんで座っていた。甚だしいのは、それで物を食べていた。座席に座らないで、しゃがみこんで猫背になって喋ったり飲んだりして、たむろしていた。そういう状態をイメージしてください。

孔子が歩ってきたら、小さい頃の友人だった原壤がそういう状態で待っていた。それで瞬間的に孔子もカチンときたのでしょう。「お前は…」と、杖で脛を叩いた。痛いという顔をしたのでしょう。お前も神経があるのかみみたいな無言のやり取りがここにあると思うのですが、お前は小さい時から素直ではなく、目上の人間には突っかかるし、やりたいことをやりたいようにやっているし、親が死んだ時にまともに親を悼む気持ちもなかったと。まったくお前は小さい時から酷かったけど大人になっても直ってないじゃないかと、顔を見て言いながら、一回ぼんと叩いて氣をつけなさいではなくて、お前は大人になってもごく潰しでと何回も杖で脛を叩く。相当腫れ上がるだろうね。そういうことが見ればいい

ですな。

これを現代に当てはめてみると、先ほど論語の素読は、政治・経済それから教育等でみましょうと言いました。

政治の場合は、目先で考えればこの間の選挙です。小池劇場と安倍パフォーマンス。まあ酷いなと思いました。象徴的だったのが希望の党を作った途端に、目先の票が欲しくてドドッと動いた。日本の政治の酷さ、体たらくというのは、この間の選挙で見えてきたような気がいたしました。そこで必要なのは、どこに「百年の計ありや」ということです。今後の日本百年の体系を見つめて私はこういう政策、こういう考え方で今回立ちましたと言えれば良いのと感じました。マスコミもよくないですが、目先のものばかり追いかけていないで百年の体系について、こういう構想を持っている人たちとか特集すれば良いと思います。

もし天風先生が生きていたら、ああいう選挙を見てどう言いますかね。百年の体系ではなくて、人間の人間として生きる道、宇宙の考え方、宇宙の摂理、それから人類・日本人は、どうあるべきだという解き方をするのではないかなと思います。目先としては百年ではなくて千年ぐらいの単位で見れば良いと思います。政治については、そういうことだと感じます。

経済の世界については、今日の読売新聞を見たら「タカタ負債 1 兆 800 億円」欠陥エアバックの巨額リコール費用を抱えて経営破綻。タカタは 1 兆 800 億円という凄まじい負債額です。次から次に酷いものばかり出てきます。(読売新聞 2017 年 11 月 11 日) 神戸製鋼所の経営陣はすべて「現場任せ」と紹介されています。汚れた利益ばかり追いかけているということが色々な形で出ています。経済界はもう次から次に酷いものが出てきます。そういう経済状態は何のことはない、正しい利益を正しく追い求めているからです。

今でいけば石田梅岩かな。適正利益を追い求めていくことであれば正しい利益が取れると思います。そういうことをしている経済界の人達はどうでしょうかね。大企業をみても、あまり良いなと感じない。いわゆる中堅企業だと良いなと思える企業はあります。

最近百年以上を経た会社や企業体が気になって、百年以上経っている企業体のトップに続けて会いました。みなさん一様に創業時をすごく大事にしている。大切にしている。創業時を大切にしている企業体は良い経営をして長持ちしていくなという感じがしています。目先の汚れた利益を追いかけるのは駄目だということが経済です。

教育でみると目先の問題は、教育委員会、文科省ってどうなのかなと思います。こういう人達は一人一人と話をすると一所懸命に仕事をしている人が多いが、そうでない人もいます。ただ、結果として百年の体系を見据えて教育しているようにはみえない。目先ばかりですぐ手直しをする。だからやはり 100 年 200 年と続くような素晴らしい人間を作っていく

にはどうしたら良いか、という考え方で組織を全面的に作り直さなければいけないと感じています。

来年の干支「戊戌」をご説明します。戊戌（ぼじゅつ）の「戊」は、とにかく酷いです。「戌」は、さらに酷さがずっと繁茂する。ただし、切開手術をすればまだ間に合う。だから来年は切開手術をすれば間に合うけれども、切開手術が間に合わなければ、オリンピックが終わった直後から日本の没落は加速度的に広がっていく。だから安倍政権が続いたということは、どうしようもなくなる環境が設定されたというのかな。そんな感じがいたします。

【四七】けつとう どうじ めい おこな ある これ と いわ えき 闕党の童子 命を將う。或ひと之を問いて曰く、益せんとする者かと。子曰く、われ その くらゐ おの み 吾 其の位に居るを見るなり。その せんせい なら ゆく み 其の先生と並び行くを見るなり。えき もと もの あら 益を求むる者に非ざるなり。すみや な ほつ もの 速かに成らんことを欲する者なりと。

「闕党の童子命を將う」党は家が 500 件ある。そういう所を党といいます。闕という村にいた少年を孔子が自分の傍に置いて、お客様が来た時の取り次ぎをやらせていた。それを人を見て「この子は先生が見込んだ子ですか。優秀なのでしょうね」と。「子曰く、吾其の位に居るを見るなり」ですから、「この子は駄目なんだよ」と。「其の位に居る」は、大人の席に座っているのを見るし、その先生と一緒に並んで歩く。これは「益を求むる者に非ざるなり」本当に学問を求める者ではない。一氣呵成に偉くなろうとしているだけの者。だからこの子は少し手元に置いて、取次の役はこうだとか長幼の序だとか礼儀作法を教え込んでいる。それによって真剣に人間としてまともな者になりたいということが若干みえるから、指導していこうと置いているといいます。

ここでいえることは自分で考えてみて、我々はせめてしていませんかねと読めばよいとお考えください。

今日の判断基準の人生については『修身教授録』を先ほど申しあげましたので、その中で書いてある物で見ていただければ良いでしょう。

最後のまとめとして、人生はただ一つですから、自分の人生ただ一つ。この世に生まれて、誰か人さまのために自分の言葉、自分の行為、行いが人さまの役に立つこと、ためになること。人さまが「有難う」「嬉しい」と言ってくれたいことが、自分の人生を使うことが宇宙の真理に直結します。

いつもの恒例の質問をしていないから、質疑応答の時にやりましょう。ということで終了でございます。有難うございます。